

2023年度 大学院奨励研究員研究報告書

2024 年 3 月 21 日

関西学院大学学長 殿

奨励研究員

氏 名	馮 佳 譽	印
-----	-------	---

指導教員

所属・職名	法学部・言語コミュニケーション文化研究科 教授
氏 名	森本 郁代 印

以下のとおり、報告いたします。

研究課題	会話分析による課題解決型の話し合いにおける参加者のコミュニケーションの仕方の解明
採用期間	2023 年 4 月 1 日 ～ 2024 年 3 月 31 日

研究科委員長・研究科長	研究科受付印

提出先： 所属研究科事務

※所属研究科→研究推進社会連携機構（大学院）

研究発表状況（奨励研究員採用期間内に発表したものおよび、近く発表予定のもの）

（１）学会誌等への発表（著者、発表論文名、学会誌名、巻号、発表年月、掲載頁等）

雑誌論文	著者名		論文題目			
	雑誌名			巻号	発行年月	掲載頁

雑誌論文	著者名		論文題目			
	雑誌名			巻号	発行年月	掲載頁

図書	著者名		論文題目			
	書名			発行年月	頁	
					総頁：	
				担当箇所：		

※論文題目：共著の場合の担当部分のタイトル

（２）学会発表（口頭・ポスター：学会名、開催地、発表論文名、発表年月日等）

学会名	社会言語科学会 第4回スチューデントワークショップ	開催地	桜美林大学
題目	話し合いにおける提案者の先取りのな否定的評価	発表年月日	2023. 9. 16

学会名	第48回社会言語科学会研究大会	開催地	福岡女子大学
題目	話し合いにおける提案に対する否定的意見への対処の仕方	発表年月日	2024. 3. 10

学会名		開催地	
題目		発表年月日	

研究経過状況（3000字程度）

私の研究テーマは、参加者が協働的に一つの成果物を作り上げることがゴールである話し合いにおいて、そのゴールを達成するために、参加者がどのように各自の提案や意見を述べたり、互いの意見をどのように擦り合わせていくのかについて検討し、話し合いにおけるコミュニケーションの実態の一端を明らかにすることを目指すものである。現時点では、「話し合いにおける参加者間のコミュニケーションの実態に関する会話分析的研究：提案共有場面に見られる否定的な意見表明とその対処に着目して」を博士論文の仮タイトルにして、博士論文を執筆している。現時点の章構成および各章の概要は以下の通りである。

第1章 序論

第1章では、まず社会生活における話し合いおよび話し合いの質を高めることの重要性に鑑み、話し合いにおけるコミュニケーションの実態を把握することが必要であるという本研究の出発点を提示する。次に、本研究が注目する「話し合い」、「提案共有場面」、「否定的な意見表明とその対処」といった現象の定義を説明した上で、それらの現象に関わる先行研究の知見を「コミュニケーションの類型化を目的とする研究」と、「コミュニケーションの内部秩序の解明を目的とする研究」という二つの観点に分けてまとめる。続いて、まとめられた研究知見を踏まえた上で、本研究がなぜ「会話分析」という方法論を採用するのかを述べる。本章の最後に、本研究の研究目的、研究課題、本研究の構成を順に述べる。

第2章 先行研究

第2章では、序論で概観した、話し合いで行われるコミュニケーションの仕組みや秩序の解明を目指す研究を、「相互行為の外部・内部」の二つの視点に大きく分け、各視点からの研究成果をより詳細に整理した上で、それらの成果と本研究との関わり、そして各視点の研究で残された課題について述べ、両視点の研究において本研究がどのような位置付けになるかを示す。

第3章 方法論とデータ

第3章は、本研究が採用する会話分析の方法論とデータの概説を行う。まず会話分析の起源と発展を紹介し、会話分析の基本的な考え方について説明する。次に、分析に関わる会話分析の用語と基本概念について紹介した上で、それらの用語や概念が話し合いを分析する際にどのように用いられるのかについて述べる。最後に、本研究のデータの概要、及びデータを書き起こす際の記法について説明する。

第4章 提案に対する提案者側の否定的な意見表明：提案説明の際に見られる提案者の先取りのな否定的評価に着目して（投稿済み、審査中）

第4章では、提案者が自分の提案を他の参加者に説明している際に、自分の提案に対して自ら否定的評価を行うという実践に焦点を当て、その実践の産出上の特徴と相互行為上の働きについて分析を行った。その結果、そのような提案者の否定的評価は、提案の構想段階から実践段階までのプロセスに存在する様々な問題を提案者が自ら指摘するとともに、さらにそれが用いられる位置によって、提案者がこれから述べようとする提案の質、もしくはその評価によって示された問題への対処を述べることを予示する役割を果たしているということが明らかになった。提案者はそのような先取りのな否定的評価を用いることで、他の参加者が非選好的な否定的意見を出しやすい場を作り出すとともに、提示された問題の解決に向けた意見を引き出す機会も用意する。その結果、参加者が多様な意見が述べやすい環境が生み出されることになる。このような提案者の先取りのな否定的評価は、合意形成のゴールを達成するために、参加者間の深刻な対立を回避し、問題解決をめぐる参加者間の積極的な意見交換や交渉を促進する一つのやり方であると言える。

第5章 提案共有場面に見られる提案に対する聞き手側の否定的な意見表明（論文化済み）

第5章では、提案共有場面において、提案者の提案説明がなされた後、その提案に対する聞き手の否定的な意見表明がどのようなものなのか、どのように産出されるのか、そして、なぜそのような仕方では否定的な意見表明を組み立てているのかについて分析を行った。その結果、提案共有場面に見られる提案に対する否定的な意見表明には、提案の内容に関する「既存内容の問題点を指摘するもの」と、提案の内容の実現可能性を問う「実現可能性の問題点を指摘するもの」の二種類があり、いずれも新たな発話連鎖が始まりうる位置で産出されていることがわかった。また、その二種類の仕方は、いずれも指摘の内容を直接述べるのではなく、提案者に提案内容を説明する機会を与えながら徐々に指摘の内容を明示化していくことがわかった。そのことから、参加者が否定的な意見表明を産出したり対処したりする際に、明示的な対立を協働的に避けているという参加者の志向が見られた。

第6章 提案に対する否定的意見への提案者側の対処（学会発表済み）

第6章では、第5章で分析されたような、提案に対する否定的意見がなされた後に、提案者がどのようにその意見に対処するのかを、意見を受け入れる場合と受け入れない場合に分けて分析を行った。その結果、否定的意見に対して提案者は単にその意見を受け入れたったり拒否したりするだけではないことがわかった。提案者は、否定的意見を述べた聞き手との対立を深刻化し

ないようにするという人間関係の維持と、提案の妥当性が否定されないようにするという提案者としてやるべきことを十分に行ったことの証明という二つのことに志向しながら否定的意見に対処することが明らかになった。つまり、提案への否定的意見に対して、提案者は人間関係を維持しながら提案者としての立場を守るという複雑なことを達成するように努めていると言える。

第7章 提案に対する否定的意見の後の参加者の参与のあり方：意見の対立による参加者間の「チーム分け」の現象に着目して(学会発表済み)

第7章では、提案に対する否定的な意見がなされた後、対立した意見のどちらを支持するかによって参加者がいわば「チーム」に分かれるという現象に焦点を当て、提案者と否定的意見を述べた聞き手以外の参加者の参与のあり方について分析を行った。その結果、提案を支持するチームは、否定的な意見に対する提案者自身の返答を優先し、その返答の進行が滞った際に形成され、返答につまる提案者に話し続けられるポイントを与えることで提案者をサポートするという特徴を持っていることがわかった。一方、否定的な意見に賛成するチームは、その意見に対して、参加者が早い時点（その意見の産出と重なる形）で、自分の同意を示した上で、同じ否定的な立場をとる意見を出すことによって形成されたという特徴が分かった。そのチームの参加者の振る舞いは否定的な意見に同意するとともに、提案への不同意を示すという二つの相互行為を同時に遂行しているという特徴が見られた。

第8章 結論

最後の第8章では、第4章から第7章までの分析結果をまとめ、本論文の分析によって得られた知見を整理し、本論文の意義や今後の課題と発展について述べる。

以上が、2023年3月20日時点の博士論文に関連する研究の成果である。現時点では、上記の8章のうち、第1章から第4章の内容が完成している。第5章の内容は3月末に仕上げる予定である。残りの第6, 7, 8章については、すでに学会で発表した内容に基づき、2024年6月までに完成する予定である。また、完成している原稿の修正は、随時に指導教員と相談し、未完成の原稿の作成と並行に行っている。これから、2024年9月の博士論文提出を目指し、研究を進める予定である。